

環境について  
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

# Save The Kikuchi River



## 菊

池川支流の川や湿地帯には必ずと言っていいくらいアシがびっしり繁茂しています。アシはヨシとも言いますが「葦」は「悪」とも通じ、ひびきが良くないためか「ヨシ」という場合が多いようです。意味は同じです。河川敷一面にヨシの群落に占領され他の雑草が生える余地もないほどで、どちらかというと邪魔者扱いされるくらいです。河川工事により、菊池川の支流の小川は川床をさらえ、凸凹なくして川床全体が湿地帯のような状態になった所が多く、ヨシの繁殖には非常に条件の良い場所になってしまいました。「豊葦原瑞穂国」とは我が国の古い呼び名で、自然に恵まれた豊かな国と言う意味だと思えます。

ところで大や猫の入る隙間もないほど生い茂ったヨシ原は小鳥や小魚たちの憩いの場としては大変役立つています。外敵から身を護り、隠れ場として、遊び場として、餌場として、また小鳥の巣もあります。水に浸った根本は小魚の産卵場所にもなっています。いわば小鳥や小魚の遙籃のような役目をしているといったところでしょうか。

ところででしょうか。

イネ科、ヨシ科、ヨシ、8〜9月に開花し、川岸、湖岸など水分の多い所で繁殖し、昔から紙を漉くパルプの原料に利用したことから文化の発展に寄与してきました。17世紀のフランスの思想家・数学者ブレイズ・パスカルは彼の書き残した原稿の中に「人間は考える葦である」という有名な言葉があります。なぜ葦なのかよく分かりませんが、アシはかよいから自然の暴威に対しては無力でありそれは従順に従い、それを切り抜けるとまた元のように立ち上がり暴威にも屈しない、それに何よりも考えることができるということだろうと思えます。パスカルといえば一番身近な「パスカルの原理」を思い出します。「密闭した液体の一部に加えた圧力は液体内のすべての部分に同じ力で伝えられる」という簡単な原理ですが、これが自転車のタイヤの空気入れや油絞り機の水圧機などいろいろ我々の日常生活に役立っています。

ヨシはあまり繁殖力が強いので嫌われる場合もありますが、昔は簾(すだれ)や衝立(ついたて)など夏の高級家具の材料になくはならないものでした。今でも京都あたりではヨシ屋根などに利用される場合もあるようです。カヤやワラ屋根に比べて耐久性や排水性に優れ、夏涼しく、冬暖かく瓦屋根よりもむしろ贅沢な材料といえるでしょう。

ヨシの主な産地は琵琶湖周辺ですが、滋賀県では栽培しているところもあります。冬季に枯れたヨシの地上部分を刈り取り、その上に雑草などを並べて火で焼けば、来年はまた立派なヨシが採れるということです。刈り取ったものは夏の簾や衝立などに利用しているようです。

和水町には栽培しなくても秋になると川原一面、困るくらい沢山の枯れたヨシができますので、邪魔者にならないですだれなどの原料にしたら安くて良い製品ができはしないかと思えます。小屋の二階に眠っている昔の炭俵編み機や米俵編み機を引っ張り出してきて「昔取った杵柄」とばかりお年寄りの技術をもってしたら、和水町特産のいろんな面白い製品ができはしないかと考えます。

## 歴史調査の楽しみ方

# 江栗城跡

## 6

## 大田幸博

(元菊池川流域同盟副委員長)

I 郭は、北西端(B区)を除くと、大方の縄張り(6)が明らかになりました。

山頂 中心部の(6)は、標高58.5〜56mで、4ブロックに細分されます。全長31m、幅は中央で4.5mに括れ、北端11m、南端で20.5mに広がります。最高所は、テール状の(6-1)で、南側の(6-2)とは、0.5mの高低差があります。特筆すべき点は、(6)〜(6-3)が、北側へ緩傾斜していることです。この形状は、志口永城跡のI郭に良く似ています。(6-1)は、旧地形の掘り残しと思われる。

(7)は、標高55〜51mで、(6)の北端から北西側へ下ります。ここも、4ブロックに細分されます。「く」字形の傾斜地で全長27.6m、幅は、上位で9m、下位で4mあります。

山頂の縁下 東下に(8)、西下に(9)、南下に(2)の帯状平地があります。標高57m、山頂との高低差は1m。(9)は、長さ41.5m、最大幅5.4mあります。

山頂直下の山腹 北西下に(10)・(29)・

南西下に(11)・(16)〜(21)、南東下に(3)の帯状平地があります。(10)は標高54m、全長41m、最大幅5.8m、北端の標高52〜50mの範囲で、2ブロックに細分されます。(10)は、下位の(29)と共に、山頂の北西末端尾根(B区)に繋がります。

山腹C区 標高54〜45mに、5段(11)・(18)〜(21)が造成されています。上位の(18)は、台形をした緩傾斜地で、長さ14m、最大幅10m。下位の(21)は、細長の帯状平地です。全長35m、最大幅5m、下位の(16)とは4mの高低差があります。このC区と未調査のB区で、迫地D区が形成されます。さらに、南側では、(3)〜(5)派生尾根の造成地とC区で迫地E区を形造ります。

迫地D区 標高49〜41mの迫地に、6段(22)〜(27)が造成されています。この内、3段(22)〜(23)・(23)〜(24)・(25)〜(26)各間の高低差は、2mを越えています。いずれも、三日月形の平地で(26)は全長32m、最大幅11mあります。

迫地E区 標高49〜44mの迫地に、4段(12)〜(15)が造成されています。(11)・

の内、3段(13)〜(15)は、直線的な带状平地で、下位の(15)は、長さ36m、幅5.8〜10mあります。

西縁F区 (16)は、標高42〜41mの範囲に、(28)は、標高41〜40mの範囲にあります。さらに、(16)の下位には(17)が造成されていますが、総じて、このF区ラインが、I郭の西縁になります。これより下は絶壁です。(16)は、長さ60m、幅3〜13mの大きな平地です。(17)は、標高40mにあり、長さ29m、幅1.5〜8.5mです。

付記 今回は、I郭を7区画に分けて説明しました。地形に沿って、余す所なく、造成されている事が分かります。段状地形の登り降りには、容易ではありません。行動には、大きな制約を伴います。当たり前の事ですが、城は、人を近づけないように、造つてあるのです。

